

# 思想はエビデンスに勝るか？

——『教育思想史』を刊行して

今井康雄

六月に「アルマ」シリーズの一冊として『教育思想史』（今井康雄編）を刊行した。「思想はエビデンスに勝る」というのは、帯にデカデカと掲げられた本書のいわばキャッチフレーズである。キャッチフレーズは恐ろしい。本文よりもこのフレーズにまず目が行くようで、本書を贈呈した研究者仲間からも、帯に言及した反応がかなり返ってきた。と、このように言うところ不平不満を述べているように聞こえるかもしれないがそうではない。このフレーズは、編者の今井による導入の章（「は

じめに——教育思想史の考え方」）のなかの一節である。それを帯のキャッチフレーズに選んだ編集者の慧眼に、私は実のところ大いに感心したのであった。本書は教職課程用の入門的な教科書である。その持ち場をしっかり守りつつ、しかし同時に教育をめぐる現代の議論にも一石を投じた、という身分違いの野心も本書は持っていて、「思想はエビデンスに勝る」は、この野心をチラリとのぞかせたつもりのものであったのである。

## 「教育思想史」のイメージ

『書齋の窓』を読んでおられるような読書人にとって、「教育思想史」という言葉はどのようなイメージを結ぶだろうか。それは、「政治思想史」「法思想史」などと比べてずいぶん曖昧なものに止まるのではないかと思う。「そんなものがあつたの？」という声さえ漏れてきそうな気がする。

ソクラテスやプラトンの議論を思い浮かべてもらえれば直ちに了解されるように（無知の自覚、メノンのパラド

ックス、洞窟の比喩、等々）、「教えるとは何か」「学ぶとは何か」という問いは哲学的な問いの起源とほとんど一体である。しかし近代に入ると、教育が国家・社会の重要な関心事として浮上する一方で、教育をめぐる問いは大部分が技術的・実務的なものとなり、哲学的な問いとからむことはかえって少なくなる。思想や哲学の側から見ると、教育という問題は、ロックに『教育に関する考察』があり、ルソーに『エミール』があり、デュローイには『民主主義と教育』がある、という具合に、個々の思想家の関心に応じて時に浮上するが、そこに一貫した展開なり変化なりがあるようには見えない、ということになってしまふ。

## 教員養成のなかの教育思想史

政治思想史が主に政治学のなかで、法思想史が主に法学のなかで研究され

ているように、教育思想史は教育学のなかで研究されてきた。教育学は、医学や法学同様、パンのための学問である。医学が医師と、法学が法曹と結びついているように、教育学は教師という職業集団と深く結びつき、教員養成と不可分の形で成長してきた。教育思想史の研究もこうした制度的な枠組みのなかにある。本書『教育思想史』も、教育職員免許法施行規則に定められた授業科目「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を想定して編まれたのであった。

しかし、教職課程のなかで教育思想に関わる内容が占める割合は、近年ではどんどん小さくなってきているようだ。その背景には、教師としての実践的な能力を養う上でそうしたものがいったい何の役に立つのか、というもったもな疑惑の広まりがある。たしかに、思想家の名前とその著作物の名前を結び

つけるような知識——かつては（あるいは今でも？）この手の問題が教員採用試験に出ていたのである——が大した意味を持つとは思えない。教職課程の重点は、技術的・実務的な訓練の方向にますます移動しつつある。

こうした状況への対応として往々にして打ち出されてきたのは、教育思想史の実用化である。過去の思想ではあるが今でも役立つ発想がそこにある、ということを示すことが教育思想史の課題となる。ロックの『教育に関する考察』は、体罰の制限や学習の遊戯化など優れた主張を含んでいる、ルソーの『エミール』は子どもの発達段階を考慮した教育を唱えた点で先駆的だった、作業を学校に取り入れるというデュローイの提言は現代の「生活科」や「総合的学習」につながっている、といった具合である。このように実用化されると、教育思想史は雑多なアイデ

アを収めた道具箱のようなものになってしまふ。そこには、様々なアイデアが、時々必要に応じて適宜取り出し可能なツールとして雑然と展示されている。「教育思想史」がイメージを結びにくいのは、これまでこの種の実用的な教育思想史が支配的だったことにも原因がありそうだ。

### 別のアクチュアリティ

本書『教育思想史』で私たちが試みたことの一つは、教育思想史のアクチュアリティを、以上のような実用化とは別のところに求めることであった。私たちは教育思想というものを、適宜実用に供することのできるツールのようなものとは考えなかった。私たちはそれを、教育についての人々のもの考え方や振る舞い方を条件づけている思考の枠組みと捉えて、その大きな歴史的变化を代表的な思想家から読み取

ろうと試みた。

正直に申せば、ここには結構大きな飛躍がある。教育思想は本当に歴史的に変遷していくのか（親の子に対する思いはいつの時代も変わらない、という見方だってありうる）、またそうした変遷が代表的な思想家から読み取れるのか（思想家と言われるような人は時代の常識を超えた人であるかもしれない）。こうした疑問を首尾よく解消できていくか否かは、本文を見て確かめていただく他はない。しかし、このような飛躍を冒しても読者に伝わってほしいと私たちが願ったことがある。それは、思考の枠組みとしての、歴史と文化に深く規定された教育思想が、教育のあり方を深く規定しているのだ、という一種の感覚である。

思想は、われわれの手にあつて自由に取り捨選択可能なツールのようなものではなく、背後にあつてわれわれ自

身の視界に影響を与えているという感覚。このような感覚を持つことは、実践への教師の意欲を挫いたり、実践のための自由空間を狭めたりすることにほならないだろう。むしろ逆に、実践的な熟慮が働く自由空間を広げることにつながるだろう。私はそう考える。

上のような感覚を持つことで、教育の現実とは、不動のものとして最初から与えられている何ものかとしてではなく、様々な意図や解釈——その大元にあるのが思想である——がすでに混入した事態として現れてくるはずだからである。教師もまた、実践的な熟慮を通して、教育現実とされるものの構築に関与しているという意識を持つことになるだろう。

これが、「思想はエビデンスに勝る」というフレーズで示唆したかったことである。科学哲学的に見れば、それは「事実の理論負荷性」というありふれ

たテーゼではある。しかしそのことを改めて強調することが、教師という職業を、実務家としてではなく実践家として、つまり、単に他人の指図に従って行為するのではなく、自分自身の熟慮に基づいて判断し行為する専門家として、捉えることにつながると考えたのである。

### 何が求められているのか

教育においてエビデンスはますます追い求められている。事前規制が中心であった教育の世界でも、最近では事

後的な評価が重視され始めた。学校選択制は、親による選択という形での評価が学校の改善につながる、ということとを前提にしている。評価のためのエビデンスを求めて、全国的な学力調査が復活した。国際的なレベルでも、OECDのPIISA調査（Program for International Student Assessment）の結果は各国の教育行政に甚大な影響を与えている。「アカウントABILITY」を合言葉に、教師にもエビデンスにつながる結果を出すことが求められる。つまり、多くの親に選んでもらえた、

学力調査で生徒が良い成績を残した、そういう結果を出すことが求められるわけである。そこでは、教師の仕事は、与えられたノルマの達成に腐心する実務家の仕事へと限りなく還元されていく。

「エビデンス」という言葉は非常に強力で、それ自体が不動の現実を体現しているかのように響く。しかし、教育思想史的な修練を経た目で見たらどうか。エビデンスが現実なのではなく、あるデータを「エビデンス」として位置づけている全体の配置が現実な

のである。そのような現実の構築には  
思考の枠組みとしての思想が一枚も二  
枚も噛んでおり、その思想は歴史的・  
文化的に条件づけられていて変化可能  
だ、という見方が可能になるだろう。  
現代のような変化の激しい時代に求め  
られているのは、目先のノルマの達成  
に切れ者ぶりを発揮する実務家教員で  
はなく、上のような広い視野を持って  
自分の仕事について熟慮できる実践家  
教師ではないだろうか。

二〇〇二年にG・ブッシュ大統領の  
強いイニシアティブでNCLB (No  
Child Left Behind) 法を制定し、エ  
ビデンスとアカウンタビリティのシス  
テムによって学校を改革することを目  
指したアメリカでは、極端な成果主義  
がもたらす弊害を如実に示す「エビデ  
ンス」がすでに様々に報告されている  
ようだ。別の思考枠組みが早くも求め  
られているように見える。このような

猫の目のごとき変化は、将来を見据え  
るべき教育にとって決して幸福なこと  
ではあるまい。無責任な改革熱にうか  
されることなく社会変化に対応するた  
めに、実践的熟慮をもった教師が今日  
ほど求められている時代はないと言え  
るだろう。

#### 最後に本書の構成について

本書の野心についてもっばら語って  
きたので辟易されたかもしれない。し  
かし本書の構成は、代表的な思想家を  
軸にするという方針も含めて、ごくオ  
ーソドックスなものである。古代ギリ  
シアから始めて、近代という画期を重  
視しつつ、現代に至る流れが概観でき  
るように構成した。ソクラテス、プラ  
トンではなく、ソフィスト、ソクラ  
テス、キケロと続くレトリックの伝統  
を冒頭に置いたこと、江戸期以降の日  
本の教育思想の流れを、ヨーロッパ近

代のインパクトを考慮に入れつつ真剣  
に扱ったこと、フーコー、ルーマン、  
ハーバーマスに代表される現代の教育  
思想にまで説き及んだことが、これま  
での教科書にない新機軸と言えるだろ  
うか。一学期での講義を想定して全一  
五講、それを一人が分担執筆した  
が、それぞれの時代と思想家につい  
て、現在日本で考えられる最良のメン  
バーを揃えることができたと自負して  
いる。「教育思想史」についてある明  
確なイメージを結ばせること。これも  
本書の野心の一つである。教職課程の  
学生だけでなく、多くの読書人に一度  
眺めていただければと念願している。

(いまい・やすお)

|| 東京大学大学院教育学研究科教授

今井康雄 [編]

『教育思想史』有斐閣アルマ

四六判、三五二頁、定価二二〇〇円(税込)

●好評発売中